

改訂版弁証法的行動療法を用いたリワークプログラム

キーワード：うつ病，職場復帰，認知行動療法

岩崎 裕希 渋谷 直史
特定医療法人山容会山容病院

【目的】

日本うつ病リワーク協会が推奨する標準化リワークマニュアルに沿ったリワークプログラムは、利用期間が長期化する、併存疾患への対応が困難である、という問題点を含んでいる。一方、地方では中小企業が多く長期利用が困難である。加えて、プログラム利用者数の観点からうつ病休職者と離職者への支援を分けることが難しい。よって、うつ病休職者・離職者の双方に対応でき、比較的短期間で、疾患横断的なリワークプログラムを開発する必要があった。改訂版弁証法的行動療法(以下 DBT)は境界性パーソナリティ障害に対する認知行動療法であるが、近年治療抵抗性うつ病への効果も示されている。そのため、DBTを用いたリワークプログラムを開発し、効果検証として、プログラム開始前・修了後のマインドフルネス、反芻の変化と、それぞれの変化量の相関について解析を行った。

【方法】

プログラム概要：山容病院うつ病リワークプログラムは、うつ病寛解者を対象とし、週5日、4週を1クールとして6クール利用を標準とした。集団・個別のオフィスワークをプログラムの中心とし、心理的介入として、うつ病の疾患心理教育、集団認知行動療法を行った。集団認知行動療法はDBTのマインドフルネススキルとそれ以外のスキル(DBTの効果的な対人関係スキル、苦悩耐性スキル、セルフモニタリング、行動活性化療法、内部感覚曝露、社交不安に対するビデオフィードバックなど)を4週毎に交互に行う形とした。DBTに準じて、スタッフによる個別面談を2週毎に行った。担当スタッフは、医師、臨床心理士、作業療法士、看護師、精神保健福祉士によって構成され、作業療法士は主にDBTのマインドフルネススキル、オフィスワークに介入した。

参加者：平成28年1月以降にプログラムに参加し、平成30年8月末日までにプログラム終了から6ヶ月以上が経過した31名を対象とした。29名がうつ病、2名が双極Ⅱ型障害であった。復

職希望者が23名、就労希望者が8名であり、男性25名、女性6名であった。平均年齢は40.6±9.7歳であり、うつ病エピソードの平均回数は3.1±1.6回、平均休職回数は2.4±1.4回、平均休職期間は8.7±9.2ヶ月であった。併存症は社交不安症22名、アルコール依存症5名、回避性パーソナリティ障害2名であった。プログラム開始前のMADRSは平均10.6±6.3であり、プログラム平均利用期間は5.8±2.7クールであった。発表に際して、参加者本人および家族に対して口頭・文書にて説明を行い、書面にて同意を得た。

評価尺度：マインドフルネスの評価尺度としてFFMQを、反芻の評価尺度としてRRSを用いた。

【結果】

参加者31名中、8名がプログラムからドロップアウトし、23名が修了した。修了者のMADRSは平均4.2±4.2であった。また、修了者23名中、3名がプログラム修了6ヶ月後までに再休職し、就労継続者は20名、就労継続率は64.5%であった。修了者23名の内、1名のデータに欠損があったため、22名のプログラム開始前・修了後のFFMQ、RRSをpaired t検定で解析した結果、どちらの評価尺度においても有意な改善が認められた(表1)。また、RRSの低下量を目的変数、FFMQの増加量を説明変数として線形単回帰分析を行った結果、有意な正の相関が認められた

$$(y=2.75+0.31x, r^2=0.22, p=0.017).$$

【考察】

先行研究において、マインドフルネスは反芻を減じることが示されており、本研究結果は先行研究に矛盾しない結果であると考えられた。

今回の発表に際して利益相反に該当する企業等はない。

表1 FFMQ, RRSの前後比較

	pre	post	P値
FFMQ	99.5±15.0	116.5±20.7	0.007
RRS	53.5±16.5	45.5±12.8	0.032

模倣能力及び自己効力感低下が低下した統合失調症患者への手話を用いた模倣学習の効果

キーワード：模倣，統合失調症，自己効力感

田中 真 小山内隆生 加藤拓彦 澄川幸志 和田一丸
弘前大学大学院保健学研究科

【報告の目的】

本症例は、模倣能力低下、持続的な妄想に加え、強迫的な思考パターンにより不安が増強し、自己効力感の低下を引き起こしている。以上の症例に対し、手話を用いた模倣学習により模倣能力改善および認知機能、自己効力感の改善を目的に介入したため以下に報告する。なお、本研究について対象者には文書と口頭で説明し、同意を得ている。

【事例紹介】

50代の男性、統合失調症。X-29年大工修行中に統合失調症を発症、以降6度の入退院を経てX-10年、希死念慮が出現し入院、現在に至る。

精神機能は、女子アナウンサーに対する恋愛妄想がある。院内生活はほぼ自立している。認知機能は、The Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia of Japan (以下BACS-J) 合計のz-scoreが-1.77で重度、言語性記憶が良く数字順列-0.49(正常)の成績は良いが、ロンドン塔-3.4(重度)等視覚イメージの保持操作の成績が悪い。注意機能はMental Rotation Test (以下MRT)合計22.7秒、誤答数3/10、Stroop Test(以下ST)は23.2秒であった。模倣能力の評価には標準高次動作性検査の片手、両手の手指構成模倣7項目と認知症の簡易診断で用いられている逆キツネの計8項目で評価したところ、10/16点であり、キツネ、逆キツネ、蝶の模倣が不可。初対面の職員や芸能人の生年月日を瞬時に記憶する。外出時に車のナンバーを一台一台記憶し、昔の知人の生年月日と関連付け「連絡を取りたがっているのだろうか」と思い不安を訴える。自己効力感、特性的自己効力感尺度合計49点(同年代健常男性平均80点)だった。

【介入の基本方針】

本症例は、作業意欲や日常生活能力、自己管理能力の高さなど高い能力を有しながら、入院が長期化している。しかし車のナンバーと生年月日に関連付けて「知人が連絡を取りたがっている」と思うなど、言語記憶能力が高い反面、記憶した情報を不必要に関連付けてしまうなどの強迫的な思

考を有している。認知機能面の問題として特徴的なのが模倣であり、模倣検査ではキツネや蝶の模倣ができない。模倣能力は、正常発達においては言語記憶の発達とともに意味記憶が蓄積することで成長する視空間イメージの保持とも関連している。本症例も認知機能の中でも視空間認知能力を意味するMRTやBACS-Jのロンドン塔の成績が低い事から、強迫的に言語記憶を保持している事により視空間イメージの保持能力が低下し、模倣能力の低下につながっていると考えられた。

【作業療法実施計画】

個別プログラムとして手話を用いた模倣学習を行った。介入期間は4カ月であり、介入頻度は週1回約40分とした。内容は名前、出身地、住んでいる場所、趣味、好きな食べ物、以前行っていたスポーツなどを交えた自己紹介を行った。初めに作業療法士(以下OTR)と共にセッションで用いる手話単語を模倣し、その後OTRが自己紹介し、症例が自己紹介する形式で行った。

【結果】

精神機能は、恋愛妄想特変無し。認知機能はBACS-J合計のz-scoreが-1.46で中等度に改善、ロンドン塔は-1.7で重度であった。注意機能は、MRT合計17.9秒、誤答数1/10、STは17.9秒に改善した。模倣能力は12/16点でありキツネが出来るようになった。外出時「車のナンバーは気にならなくなった」と発言した。自己効力感56点に改善した。

【考察】

手話単語は文字や形態などを基に構成されており、手話を学ぶ際には教示者の手話動作から文字や形態を想起し、模倣し視覚イメージとして記憶保持する。今回手話による模倣学習を实践した事で視空間認知能力及びに強迫的な言語性記憶強迫的取り込みが改善され、手指身体を主体的に動かす感覚を得られた事で自己効力感が向上したと考えられた。

注意欠陥多動性障害(ADHD)児における作業療法～学校との連携を通して～

キーワード：就学，地域連携，発達障害

梅津雄志

社会医療法人一陽会 一陽会病院

【はじめに】

最近では「発達障害」がメディアに特集されることが多くなり，発達障害が世間に広く知れ渡り始めている．当院では発達障害の診断される方が年々増加しているように感じる．

今回，注意欠陥多動性障害(以下 ADHD)を呈した当時，小学6年生の男児に小学校と連携して取り組む機会があり，事例の経過と小学校との連携について以下にまとめ報告する．尚，本人，家族から発表に対しての同意を得ている．

【事例紹介】

小学6年男児．IQ86．診断名：ADHD．体型：同年代男児より大きな体つき．現病歴：小学中学年より学校や家庭内で人に注意されたことに対して腹を立て暴れるようになる．高学年になり，学校を休みがちで昼夜逆転の生活になる．市のスクールワーカーの勧めで当院初診となる．学校や家で興奮状態を繰り返し，警察介入で当院へ医療保護入院となる．入院時，保護室隔離，四肢拘束．学校で暴れたことにより保護者会から通学に対して拒否的な意見が出され，通学ができなくなる．家族構成：父，母，姉．主訴：「病気を治したい」「友達と遊びたい」「オセロが強くなりたい」

【経過・結果】

〈入院時の作業療法〉約2ヵ月

四肢拘束解除時より保護室内で個別作業療法(以下 OT)開始になる．本人の希望でオセロを行い，筆者が大勝するも挫けずに再戦を希望する．

隔離解除となり OT プログラムに参加．スポーツ等のプログラムには参加せず，オセロとパソコンのみを行う．オセロで筆者に勝利するも「次は負けそうだな」と自信がない様子を見せる．

筆者にオセロで勝てる頻度が上がると他スタッフにも「オセロやろう」と声かけするようになる．この頃からスポーツにも参加するようになる．

精神状態は落ち着き，易怒的になることが少なくなり退院となる．退院時の薬剤情報はデパケン R錠 200×4錠，リスペリドン錠×2錠である．

〈外来での作業療法〉約6か月

退院後は外来 OT にはほぼ毎日参加し，ガンダムのプラモデルやエコクラフト等を行うようになる．「ガンダムのプラモデルをやっていると時間を忘れてしまう」と集中して取り組める．

〈小学校との連携〉2回

退院するも通学はできない現状であるため小学校の校長・教頭・担任，フリースクールスタッフ，筆者，当院精神保健福祉士，母親でケア会議を実施する．家庭，学校，病院の様子や今後の方向性について等を話し合う．また，小学校の先生から指導の仕方について等質問がある．OTR として医療的・作業療法的な視点を踏まえ，本人への指導の仕方，関わり方，環境調整等について伝える．保護者会から通学許可になり，保健室登校から開始となる．以後，落ち着いて通学している．

【考察】

本事例は小学中学年より他者と比較してできないことが多くなり，劣等感や焦燥感を感じ始めたと考えられる．さらに注意されることが多くなり易怒的になったと予想される．今回，本人が希望したオセロを通じた関わりが自己効力感を高め，自己評価が上がり，自信に繋がったと考える．自信が挑戦心を引き出し，好循環となり，今まで感じていた劣等感等が軽減して不適応行動が少なくなったと考える．

登校後も不適応行動なく過ごすことができた要因としては小学校と連携し，情報共有をすることで現状把握ができ，さらに OTR が医療的な立場から環境調整等について助言をしたことで統一された関わりができたからではないかと考える．

【おわりに】

保護者会が通学に拒否的になったのはメディアが「発達障害」を取り上げ世間に広く知れ渡る反面，悪い面だけが一人歩きしていることが考えられる．今後，OTR が教育現場にも関わることで医療的な観点から助言していき，積極的に連携をしていく必要があると感じる．

保育所等訪問支援での取り組み

キーワード：発達支援，訪問支援，アンケート

佐藤 あい

総合発達支援プラザ ふらっぷ

【はじめに】

平成 25 年 8 月に総合発達支援プラザふらっぷ（以下、ふらっぷ）を開所してから 5 年が経過した。ふらっぷは、児童発達支援、放課後等デイサービス、保育所等訪問支援の 3 つの福祉サービスを有する多機能型の事業所として発達支援に携わってきた。保育所等訪問支援は会津地域では初めての事業であった。今回は、保育所等訪問支援で実施している内容と平成 29 年度に実施したアンケートの結果を紹介し、考察を加える。

【保育所等訪問支援の現状（平成 30 年 11 月現在）】

契約数：54 人。延べ訪問回数：295 件。

訪問支援員：作業療法士，言語聴覚士，
臨床発達心理士

訪問先：保育所，幼稚園，認定こども園，
支援学校，子どもクラブなど

※対象は、ふらっぷの児童発達支援または放課後等デイサービスの通所支援を利用しており、保育所等訪問支援の希望があった児童。

【実施している支援の一例】

1 歳 8 ヶ月男児。発達障害。

こども園を週 4 回、ふらっぷを週 1 回利用。

訪問頻度は 3 ヶ月～半年ごとに 1 回。

発達促進と生活環境（特に食事場面）の調整を目的に訪問実施。

ふらっぷでの評価：座位，腹ばい可。表情の変化が乏しく，発声も少ない。様々な玩具を手取るが，口に運ぶのみで，玩具に合わせた遊びが難しい。食事は細かく刻んだ副食とやや柔らかめの主食であるが，咀嚼が不十分で丸のみとなることが多い。遠城寺式：移動 7～8 ヶ月，手の運動 6～7 ヶ月，基本的習慣 6～7 ヶ月，対人関係 9～10 ヶ月，発語 5～6 ヶ月，言語理解 6～7 ヶ月

ふらっぷでの支援（食事場面での介入）：家族と共に食形態を検討し，全体的に食形態を柔らかめにする事とした。小スプーンにして一口量を調整し，舌の動きを引き出すように関わった。

こども園での評価：お友達と並んで座位保持椅子に座り，姿勢は安定。幼児用のスプーンでやや小さめに切った幼児食を摂取。食事に興味があり取り込みは良好だが，舌は前後運動が中心で押しつぶして飲みこんでいる。時折，咳き込みもあり。こども園での支援（食事場面での介入）：ふらっぷでの介入と同じように実施すること，形態の変更が難しい場合は代替のものを準備することを提案。訪問支援後の変化：食事の際に咀嚼様の動きが見られるようになった。その後，発達状況に応じて，手づかみ食べ，コップ飲みに向けた練習などを継続して実施。また，訪問するごとに先生方からより具体的な質問が増えるとともに，良い反応が見られた支援方法の報告が聞かれるようになった。

【保育所等訪問支援に対するアンケート結果】

平成 30 年 1 月～2 月に実施。ふらっぷが訪問支援に関わった全 25 施設中 22 施設の回答を得た。「訪問対象児における支援内容が園にとって適切な支援であったと思いますか」に対して「適切である」が 100%。また，「訪問支援で共有した内容がその後の園での生活に活かされていますか」に対して「活かされている」が 95%であった。「ちょっとした工夫を加えることでより生活しやすくなる」などの意見もあった。

【考察】

保育所等訪問支援は件数が増加してきている。アンケート結果からも地域の園や学校の先生方と協働しながら子どもの支援を考えていく形態が少しずつ構築されてきていると感じる。そこには，ふらっぷと地域の園を併用することで児の持つ能力や発達段階を共有し，適切な支援が提供できること，専門職の視点を持ちながらその場面に応じた支援を展開できること，先生が実施している内容を共有し支援の後押しができること等が強みとして考えられる。今後に向けて，訪問後の連続した発達支援の体制を整備しながらより連携できる環境づくりを進めていきたいと考える。

再現遊びから人への関心・関わりが増えた症例～児童発達支援での介入～

キーワード：連携，児童発達支援，再現遊び

神保 なつみ¹⁾ 小川 友美²⁾ 岡本 絵美¹⁾ 三浦 璃奈¹⁾

1) アーチ天童 2) アーチ

【はじめに】

本症例は自閉スペクトラム症(以下 ASD)と精神発達遅滞(以下 MR)を呈した 3 歳 7 ヶ月の男児である。人よりも物に対しての興味が強く、他者との言葉のやり取りが少ない。アニメの再現遊びや高い所からのジャンプを好む。お迎え時は気持ちの切り替えに時間を要し、泣いてしまう。作業療法士(以下 OTR)が個別練習を中心に関わり、保育士等による小集団での療育を実施し、改善がみられたため以下に報告する。

【症例紹介】

3 歳 7 ヶ月男児。3 歳頃、母が言葉の遅れが気にして、保健センターに相談。児童相談所で発達検査を受け、ASD の疑いと言われ、当事業所を週 2～3 回、A 事業所を週 3 回利用開始。3 歳 9 ヶ月時、療育センターで ASD、MR と診断。弟が近づくとき「ママ抱っこしてて」と言い、スペースに入られたくない、玩具を貸せない気持ちが強い。

【作業療法初回評価】(3 歳 7 ヶ月)

KIDS：総合発達年齢 2：3，総合発達指数 63(運動 3：2，操作 1：10，理解言語 3：1，表出言語 2：5，概念 1：5，対子ども社会性 1：9，対大人社会性 1：6，しつけ 3：1，食事 2：3)，JSI-R：Yellow(触覚，聴覚，視覚，その他，総合点) Wee-FIM：91/126，臨床観察：追視，正中線交差，前腕交互反復は非常に劣る。ジャンプ，ジャンピングジャック，ケンケン，保護伸展反応，立ち直り反応，平衡反応，ATNR，筋トーンヌス(低緊張)，輻輳，サッケード，スローモーション，手指・鼻運動，注意集中はやや劣る。行動観察：触覚過敏と前庭感覚・固有感覚の低反応に伴う自己刺激行動，再現遊びが多い，見通しを持つことが苦手，相互交渉が苦手。人に対する興味が乏しく言葉のやり取りが少ない，協調運動が未熟等を問題点に挙げ，目標，プログラムを立案した。

【目標】

長期目標：友達と一緒に楽しく遊ぶ。

短期目標：当事業所に慣れる。気持ちを前向きな言葉で伝えられるようになる。全身運動や指先の運

動が上手になる。

【経過】

OT 場面では課題の確認，回数予告をして見通しを持たせ，前庭・固有感覚探求ニーズを満たしてから課題を実施した。触覚過敏に配慮し，信頼関係を形成し，人との関わりを楽しめるよう介入した。ジャングルジムでは，板を指差し「ついて(つけて)」と自ら要求するようになった。離席が減少し，OTR の真似をして一緒に楽しめる。OTR が手を差し伸べると手を握る，課題を通して「先生」と OTR に声を掛けるようになる。療育場面でも大人と楽しみを共有できるように介入した。大人と玩具の貸し借りを経験し，支援があれば他児に貸せるようになった。玩具を取られると思って走っている所から，大人が介入して追いかけて共有でき，大人に再現遊びのセリフを言う，「先生助けて」等，大人との関わりと遊びの幅が広がった。帰りは気持ちの切り替えが困難で泣いていたが，視覚的な予告で切り替えられる。

【再評価】(4 歳 0 ヶ月)

家庭：要求を言葉で伝えることが増え，やり取りが楽になり，気持ちの切り替えが早くなった。弟の服を準備する等，関わりが増えた。臨床観察：ジャンピングジャック，ケンケン等が上手になった。前腕交互反復のスピードが速くなり，片手ずつ連続してスムーズにできる。クレヨンも静的三指握りが増える。OTR の手を引き要求する等，人への関わりが増えた。運動は集中が続かず多動傾向で走って遊ぶことが多い。

【考察】

視覚的に予定を提示することで見通しを持ち，気持ちの切り替えができたと考える。前庭感覚・固有感覚の感覚探求を満たし，触覚過敏に配慮しつつ，本児に合わせ一緒に遊ぶ中で大人への安心感を得て，人との関わりが増えた。療育と連携し，大人と楽しみを共有することを共に目標を統一して介入したことが効果的であったと考える。

非定型発達児における療育前後の更衣動作時の荷重中心点推移

キーワード：非定型発達児，更衣動作，荷重中心点

森川 敦子^{1) 2)} 松田 直子¹⁾ 浪花 里依²⁾ 森川 詩奈²⁾ 藤井浩美¹⁾

1) 山形県立保健医療大学大学院，2) 株式会社 奏音

【報告の目的】

定型発達児は、10 ヶ月過ぎから頭部、体幹、上肢の分離運動が発達する。そのため、対象物の操作が可能となり、更衣への協力動作が増加する。4 歳になると、着脱を順序良く行うことが可能になり、その後は徐々に更衣動作の自立度を高めていく¹⁾。しかし、非定型発達児には、認知面に問題がなくても、更衣動作が不得手な児がいる。この場合、姿勢の安定性、両側協調運動、力の制御、身体イメージが捉えにくい。これまで、非定型発達児における更衣動作中の姿勢の安定性や運動性の指標は明確ではない。そこで、本研究の目的は、非定型発達児に対して、更衣動作中の動画と荷重中心点 (COP) 推移を指標に調査することとした。

【対象と方法】

対象は、通常学級 2 年生に在籍の男児 (7 歳 8 ヶ月) であった。倫理的配慮は、山形県立保健医療大学倫理審査委員会の審査 (承認番号 1809-18) を受け、被験者と保護者には口頭と書面による十分な説明を行い、同意を得てから行った。

方法は、時間分解能が 100Hz の足圧分布解析装置 (EM-MP2703, 酒井医療株式会社) と毎秒 30 コマのカメラ 2 台 (Logical HD Webcam C920 Logitech) を同期して用いた。

課題は、療育前後に 10 秒間静止立位と被りシャツの着脱とした。手順は、対象児の来訪直後に足圧分布解析装置上で 10 秒間静止立位と被りシャツとズボンの脱着衣を実施した。その後、対象児は 60 分の療育を受けた。療育終了後に前述と同様の手順で測定を行った。

解析方法は、10 秒間静止立位と着衣動作時の前方・側方動画と足圧・COP の推移を療育前後で比較した。

【介入の基本方針】

ポニースウィング、ボルスターを用いて、うつ伏せ、上肢のみで掴まる乗り方を行う。スウィングが揺れることによる前庭感覚と固有受容感覚の入力で、対象児の感覚入力欲求を満たす。

モンキースウィングとクッションを用いて実施

した。モンキースウィングに掴まり、揺れながらクッションを蹴る、クッションに乗り移る遊びや、作業療法士との押し合いを行なう。スウィングとクッションによる、前庭感覚と固有受容感覚の入力に加え、押し合いで両側運動を促す。

ジャングルジム上の高い位置に座ったまま魚釣りを実施し、運動の制御や対象物を見て釣竿を動かすといった目と手の協調、対象物までにどのような体幹・上肢の動きが必要であるかといった身体図式を明確化する。

【結果】

療育前後における 10 秒間静止立位は、頸部伸展、骨盤後傾し、足圧と COP 共に、後方であった。療育後は、頸部伸展・骨盤後傾が改善し、足圧が前方に見られ、COP 推移も前方となった。

療育前後の更衣動作は、「頭を通す」「先の手を通す」「後の手を通す」のすべてで、足圧の後方偏りと COP 左右推移が改善し足圧の前方移動と COP 左右前後推移が見られた。

【考察】

上述の結果から、療育前に比べて、療育後では筋緊張の高まりによる体幹の安定性向上、それによる上肢の運動性向上が、円滑な動作につながったと推察する。

体幹の安定性は、脊柱や骨盤周囲筋群の筋緊張の高まりから、抗重力運動の遂行を容易にする。そして、体幹の安定性は姿勢や動作の調節を容易にし、上肢動作を円滑にする。今回の療育では、ポニースウィングやモンキースウィングで体幹筋群の筋緊張の向上を狙い、魚釣りで、両側運動や運動の制御、目と手の協調、身体図式の明確化を狙った。このような促しによって、更衣動作中に、身体を服に合わせることが可能になったと推察する。それが側方動画、足圧および COP 推移の改善につながったものと推察する。

【文献】

1) 福田恵美子: 人間発達学. 中外医学社, 東京, 2014, 18-19.